

## ＜原著＞

# 小沢卯之助による剣術教材化への試み：医学的合理主義に立脚した 体育観に基づく剣術の創生

矢野 裕介<sup>1)</sup>・坂本 太一<sup>2)</sup>・山本 浩二<sup>1)</sup>・中山 忠彦<sup>1)</sup>

## An effort by Unosuke Ozawa to develop *kenjutsu* into an educational medium: Creation of *kenjutsu* from the medical rationalism-based concept of physical education

Yusuke Yano · Taichi Sakamoto · Koji Yamamoto · Tadahiko Nakayama

This study aimed to examine the evolution of *bujutsu-taisoho* (martial art exercises), which was advocated by Unosuke Ozawa with the intent of incorporating *kenjutsu* into physical education as a regular subject at school, from a historical viewpoint of movement techniques by comparing practice methods of *do-waza* in the *to-taiso* method (described in 1897) versus the *kenjutsu-kata-taiso* method (described in 1911). In this comparison, attention was also given to the *bokken* grip used in *do-waza* when striking.

The findings of this study can be summarized as follows:

1. In the *to-taiso* method, striking the torso on the left, which was previously eschewed in traditional *kenjutsu* circles, was put on par with striking the torso on the right. This indicated a *do-waza* practice method that focused on equitable bodily development.
2. This *do-waza* practice method was continued in the *kenjutsu-kata-taiso* method, but with the idea that all body parts need to be developed equally, even with bilateral symmetry for the *bokken* grip.
3. In Unosuke Ozawa's *bujutsu-taisoho*, *kenjutsu* was to be formulated from the viewpoint of physical education based on medical rationalism, and it was implemented in ways that refined methods for practicing *do-waza*.

**Key words** : 剣術形体操, 刀体操, 剣道, 胴技, 近代日本

*kenjutsu-kata-taiso, to-taiso, kendo, do-waza, modern Japan*

## 1. 問題の所在

近代日本における学校剣道は、中学校では1880年頃から課外活動として実施されていたが、そこには何らの指導法も技術体系も確立されていなかったという<sup>1)</sup>。剣術の教授法はもともと「各派各流分立して所謂以心伝心又

は口伝口授に依る」<sup>2)</sup>のものであり、一子相伝、一代相伝で当該技術の伝承が行われていたからである。

そのため文部省が、1883年に剣術の教育上における利害適否に関する調査を体操伝習所に委ねた際も、「学校体育法を、主として生理学や解剖学や衛生学の立場から規定しよう

1) 神戸医療福祉大学 (Kobe University of Welfare) 〒679-2217 兵庫県神戸郡福崎町高岡1966-5

2) 岐阜薬科大学 (Gifu Pharmaceutical University) 〒501-1196 岐阜県岐阜市大学西1-25-4

とした伝習所の責任者たちの体育観〔＝医学的合理主義——引用者注〕<sup>3)</sup> からみて、その指導法は1対1が基本とされていたために、「一級全体一斉に授けがたし」<sup>4)</sup> ことや、身体の発育に平等均一性を欠くなどといった理由から、国民教育のための教材としては不向きなことが指摘され、学校体育の正課教材として採用しない方針が明示されたのである。

そうした中、「文部省をはじめとした医学陣に、武道の体操化によって、その正当性を確保し」<sup>5)</sup>、この局面を打破しようと考案されたのが、小沢卯之助（以下「小沢」と略す）、中島賢三、中野篤一郎らの教育者によって試みられた武術体操法であった（図1参照）。とりわけ小沢は、1897年の『武術体操法』において「当時の学校体育の主要な教材であった『普通体操』の『一斉指導方式』を取り入れ」<sup>6)</sup> た刀体操を案出している。従前の研究によれば、小沢の刀体操では「それまでの剣術書では否定的に捉えられていた左胴打ちを〔右胴打ちと同等に位置づけて——引用者注〕練習内容に組み入れることで、身体における左右の平均的発育を狙った練習方法、すなわち医学的合理主義に立脚した体育観に基づく練習方法を提唱する」<sup>7)</sup> に至ったと結論づけられている。



図1. 中島賢三の武術体操法（＝木剣体操）  
中島賢三：木剣及薙刀体操法、口絵、目黒書店、1918より転載。

けれども、小沢が試みた武術（剣術）の体操化、すなわち剣術の教材化に向けた研究は、その後も続けられていた。小沢は「義務教育中等教育高等教育ノ諸学校ノ教科ニ加へ国民一般ヲシテ之〔＝武術体操法——引用者注〕レヲ学習セシメンコトヲ切望」<sup>8)</sup> し、その研究成果の集大成として1911年に『剣術形体操：一名・体育流剣術』（図2参照）をまとめ上げ、刀体操に改良を加えた剣術形体操を発表しているからである。それ故、小沢による剣術教材化への試みは、この剣術形体操をぬきに語るができないといっても過言ではない。

以上より本研究では、学校体育に剣術を正課教材として採用させることを念頭に置いて試みられた小沢の刀体操（1897年）と剣術形体操（1911年）とに取り上げられる胴技の練習方法の比較検討をとおして、それがどのように改良されていったのかを、運動技術史の視点から考察していくこととした<sup>9)</sup>。なお、その比較検討にあたっては、胴技を繰り出す際の本剣の把持法にも着目した。小沢の剣術形体操では、「進化セル剣術」<sup>10)</sup> として、新たな把持法が提唱されているからである。

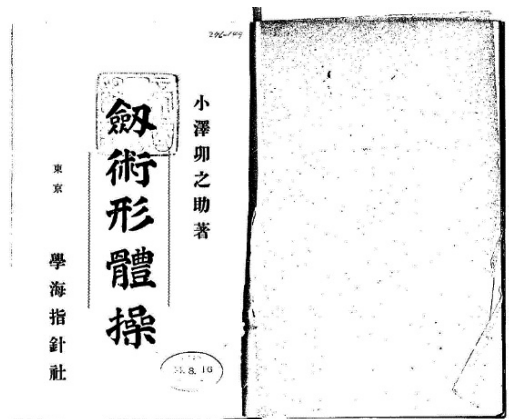


図2. 小沢卯之助：剣術形体操：一名・体育流剣術、扉、学海指針社、1911  
（国立国会図書館蔵）

## 2. 小沢卯之助の武術体操法

武術の体操化の試みは、1895、1896年頃から始められ、その主導的役割を担っていたとされるのが小沢であった。小沢は「明治十六年ヨリ十七年ニ瀕リ東京府師範在学中之ヲ唱へ引続キ研究ヲ重ネ修練ヲ積」<sup>11)</sup>む一方で、「夫レ小学校ニ於イテ児童ニ課スル体操ハ体育法ノ一半ナルヲ知ラズ体操ハ即チ体育ニシテ体育ハ即チ体操ナリト心得体操ヲ課スレバ即チ体育ノ能事了ハレリトシ彼ノ精神ノ疲労ヲ回復スベキ放課時間ノ如キ教師ハ運動ヲ奨励セズ」<sup>12)</sup>といった学校体育の現場の状況を目の当たりにしてきたことで、「体操法中ノ普通体操法ヲ以テ普通教育ト一般国民トノ両者ノ体育ニ補益アル最大良法ナリト信」<sup>13)</sup>ずるが由に、国民体育という見地から、硬直化してしまった普通体操を改良する必要があることを痛感していた<sup>14)</sup>。そのため小沢は、「今普通教育ニ武術体操ヲ応用セバ完全ナル第二ノ国民ヲ養成スル点ニ於イテ大益アルノミナラズ实用ニ益シ社会ヲ利スルヤ大ナリ政ニ吾人ハ改良普通体操ト共ニ普ク世ノ大中小学及ビ各種学校ニ行ハレ且ツ一般国民ガ之レヲ励行センコトヲ切望」<sup>15)</sup>し、「普通体操中ニ一大良法ヲ加ヘン」<sup>16)</sup>と、武術体操法を正課教材に組み入れようと主張したのであった。

この考えに基づき、実際の方法論について説いたものが、1897年に刊行された『武術体操法』である。本書における武術体操法は、「棒術、剣術、薙刀術、槍術等本邦固有武道各流派ノ法式中体育方法トシテ適当ナルモノヲ拔萃シ且ツ歩兵操典、騎兵操典、体操教範、剣術教範、舶刀操法、舶槍操法、陸軍礼式、普通礼法、普通体操法等ノ諸書ヲ参酌シ之レヲ体操ニ同化」<sup>17)</sup>したもので、「体操準備」、「予備体操」、「棒体操」、「刀体操」、「薙刀体操」、「槍

体操」の6つが案出されている<sup>18)</sup>。なかでも、刀体操に対する小沢の考え方は、次のようなものであった<sup>19)</sup>。

吾人の見る所によれば、今日の撃剣教授法を以てしては、仮令之れを正科に加ふる事と為すも、時間の不足するを免かれず。是れ実施上に生ずる教授上の障害なり。又一人を教授する傍ら、若しくは数組をして練習せしむる傍ら、他の衆生徒を監督するは困難なる可し。是れ実施上に生ずる管理上の障害なり。此等の障害を除却せずば、撃剣を以て体徳二育に無害有益の最良法なりとするも、学校生徒に正科として之れを課し、必須科として之れを授けんとするは、至難の業と云はざるを得ず。是に於いて乎、撃剣の個人的教授を廃して、学級の教授を為すの必要を感ず可し。故に先づ学級の教授法を案出し、次ぎに撃剣多少の改良を加へて、体育の本旨に適せしむるの講究を為すを要す。若し果して、学級の教授法を案出し、且つ体育の本旨に適合せしむるを得ば、必ずや現行普通体操に幾倍するの利益あるや疑ふ可からざるを以て、痴人を除くの外、之れを学校の正科に加ふるの議に反対する者無かる可し。

要するに、小沢は「従前の剣術における1対1の『個人的教授法』を撤廃し、1対複数の『学級の指導法』へ、すなわち剣術の一斉指導法を案出することにした」<sup>20)</sup>のである。そして、一斉指導法と「多少の改良を加へて、体育の本旨に適せしむる」<sup>21)</sup>剣術を用いれば、「必ずや現行普通体操に幾倍するの利益ある」<sup>22)</sup>と考えたのであった。

### 3. 刀体操 (1897年) にみる胴技の練習方法

1897年に小沢がまとめた『武術体操法』に掲げられている刀体操は、個人的に行う「第一刀体操 二十節」、「第二刀体操 二十節」、及びこれらの体操で習得した技術を基にして対人で行う「刀ノ攻守演習 二十節」、そして「居合抜体操 十二節」から構成されている<sup>23)</sup>。何れの体操も、「体操用ノ刀」<sup>24)</sup>、すなわち「木剣若シクハ木剣ノ形状ヲ備ヘタル竹製ノ刀ヲ短キ鞘ニ納メタル者」<sup>25)</sup>を「右手ニ鐐元(但シ鐐元ナリトテ拇指及ビ食指ヲ鐐ニ附着セズ縁ノ金子際)ヲ握リ左手ニテ柄頭ヲ握」<sup>26)</sup>りながら行われるが、胴技の練習方法については、第二刀体操の「第十六節 上(中)段ヨリ隅飛膝姿左右胴ヲ斬ル 四挙動」<sup>27)</sup>において、以下のように解説されている。

- (一) 右隅飛左膝姿ヲ爲スト同時ニ敵ノ左胴ヲ斬リ尚ホ續イテ刀尖ヲ廻ハシテ左面上ニ至ラシメ両手ヲ右面上ニ上ゲ面ヲ拒グ
- (二) 隅飛戻リヲ爲スト同時ニ上(中)段ニ取ル
- (三) 左隅飛右膝姿ヲ爲スト同時ニ敵ノ右胴ヲ斬リ尚ホ續イテ廻ハシ刀尖ヲ右面上ニ至ラシメ両手ヲ左面上ニ舉ゲ面ヲ拒グ〔図3参照——引用者注〕
- (四) 隅飛換戻リヲ爲スト同時ニ上(中)段ニ取ル此ノ如クシテ二回行フ…

つまりここでは、木剣の鐐元を右手で握り、柄頭を左手で握りながら、相手の「左胴ヲ斬」<sup>28)</sup>る方法と、「右胴ヲ斬」<sup>29)</sup>る方法が解説されているのである。

なお、この胴技の練習方法を、刀体操登場以前の剣術におけるそれと比較してみると

(図4参照)、斬撃する用具の把持法については変化がみられないが<sup>30)</sup>、斬撃部については、「従前の剣術界が否定的に捉えていた左胴打ちが右胴打ちと同等に位置づけられ」<sup>31)</sup>ていることがわかる<sup>32)</sup>。このことは、刀体操の「胴ニ左胴ト右胴トアリ…何レモ斬撃部トス」<sup>33)</sup>と定めていることから明らかであるが、そうした背景には「体育の本旨に適せしむる」<sup>34)</sup>剣術を創生すべく、「身体各部平等ノ発達ト練習トヲ期セシガ為メニ右ニテ演習セシムル者ハ必ず左ニテ演習セシメ」<sup>35)</sup>なければならないといった、小沢の考え方が反映されていたのであった<sup>36)</sup>。

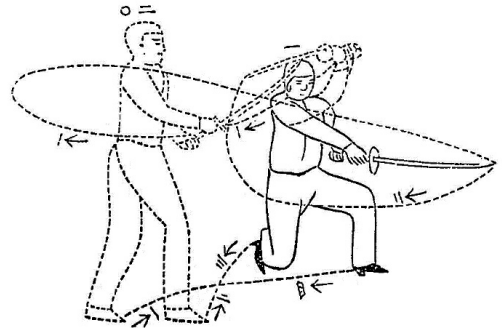


図3. 「左隅飛右膝姿ヲ爲スト同時ニ敵ノ右胴ヲ斬リ尚ホ續イテ廻ハシ刀尖ヲ右面上ニ至ラシメ両手ヲ左面上ニ舉ゲ面ヲ拒グ」  
小沢卯之助：武術体操法、168、大日本図書、1897より転載。



図4. 「居敷右胴ヲ打ち勝占メタリ」ところ井ノ口松之助：兵法要務柔術劍棒圖解秘訣、94、魁真楼、1887より転載。

#### 4. 剣術形体操（1911年）にみる胴技の練習方法

刀体操をはじめとする武術体操法は1897年の「公表以来全国到ル所世人ノ歡迎ヲ受ケ日本体育会体操学校ヲ始メ小学中学師範学校高等女学校其ノ他ノ各種学校週クハ京城旅順上海等ノ諸学校ニ迄実施ヲ見ルニ至」<sup>37)</sup>だったが、こうした趨勢を背景にして、小沢はそれを「義務教育中等教育高等教育ノ諸学校ノ教科ニ加へ国民一般ヲシテ之レヲ学習セシメンコトヲ切望」<sup>38)</sup>していた。そのため小沢は、「明治三十年八月三日ニ刊行セル拙著武術体操法ニ記述セル其ノ方法ニ漸次改正ヲ加へ」<sup>39)</sup>るべく、その実践を積みつつ研究を重ねていたのである。

その研究成果は、1911年8月に『剣術形体操：一名・体育流剣術』として上梓されているが、ここで解説されている武術体操法（＝剣術形体操）の練習方法は、「身体ノ各部首、胸、上肢、肩、脊、腹、下肢皆其ノ均衡ヲ保ツバク發育セシメ体ノ左右其ノ釣合ヲ失ハザル可ク發育セシムルノ目的ヲ以テ其ノ目的ニ適合セシム可ク組立テ」<sup>40)</sup>られている。従って、胴の斬撃部は「左胴右胴アリ」<sup>41)</sup>と定められており、その練習方法についても、以下に引用するように、左胴と右胴を斬撃する方法を解説するものとなっている<sup>42)</sup>。

##### 第十一節 半屈膝胴

###### (甲) 構

中段

左足ヲ踏込ミ左中段ニ構フ

変化構

送足上段、下段、地摺下段、

###### (乙) 左構動作

一、送足ニテ進ミ両膝ヲ少シク屈スルト同時ニ敵ノ左胴ヲ撃ツ（第

二十四図）〔図5参照——引用者注〕

但シ刀尖ヲ右、下、左方ニ廻ハス此ノ時送足ニテ進ム故、刀ハ右、下、左方ニ廻ハリツツ前出ス

此ノ撃方ハ鏢元ノ手ヲ右ニ捻ル故ニ之レヲ逆撃ト云フ

例ニ由ル以下倣之

二、送足ニテ退クト同時ニ中段ニ復ス

但シ刀尖ヲ上ゲ面ヲ撃ツ氣勢ヲ示スベシ

###### 変化動作

送足ニテ進ミツツ刀尖ヲ左、下、右方ニ廻ハシ順撃ヲ為スモ可ナリ、後足ヲ踏込ミ逆撃ヲ為スモ可ナリ又此ノ逆撃ノ方法ニテ大踏込ヲ為スモ可ナリ

###### 変化撃ノ部分

左右横面、左右頸、左右腰、左右脚

###### (丙) 右構換法

前足ヲ退クルト同時ニ両手ヲ握換ヘ中段ニ取ル（中段ニ復スル時面撃ノ氣勢ヲ示ス）

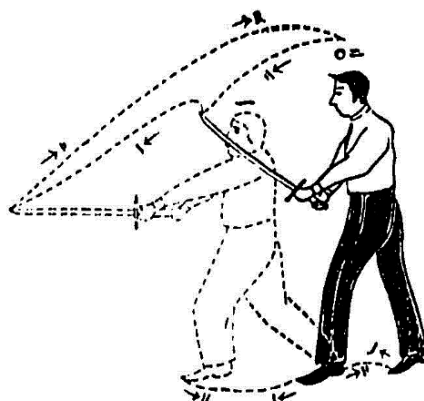


図5。「送足ニテ進ミ両膝ヲ少シク屈スルト同時ニ敵ノ左胴ヲ撃ツ」  
小沢卯之助：剣術形体操：一名・体育流剣術、96、学海指針社、1911より転載。

このように剣術形体操における胴技の練習方法は、前項で検討した刀体操のそれと同様に、左右双方の胴をそれぞれ斬撃する方法が採用されているが、その一方で、剣術形体操では従前の剣術および刀体操にはみられなかった新たな把持法、すなわち、木剣の鐔元を左手で握り、柄頭を右手で握る方法によっても胴技を展開する方法が説かれていることに注目したい（図5参照）。刀体操では「刀ノ把持法ハ…中略…右手ニ鐔元（但シ鐔元ナリト拇指及ビ食指ヲ鐔ニ附着セズ縁ノ金子際）ヲ握リ左手ニテ柄頭ヲ握ル」<sup>43)</sup>と解説されていたように、木剣の鐔元を右手で握り、柄頭を左手で握る把持法のみが提示されていたが（図3参照）、剣術形体操ではこの把持法に加え、それとは逆の把持法が案出されているのである<sup>44)</sup>。このことは、小沢が『剣術形体操：一名・体育流剣術』のなかで、木剣の把持法について以下のように説明していることから明らかである<sup>45)</sup>。

刀ノ把持法ハ構ヘニヨリ種々ノ変化ヲ来スモノレドモ右手（左手）ニテ縁ヲ握（食指ノ一部分ノミヲ鐔ニ軽ク触レシム）リ左手（右手）ニテ柄頭ヲ握ルナリ、縁ノ握り方ハ拇指頭ヲ食指ノ上ニ僅ニ覆ヒテ強キニ過ギズ緩キニ失セズ恰モ鶏卵ヲ握ルノ心持ヲ要ス、柄頭ノ握方ハ小指ヲ締メ他ノ三指ハ漸次ニ緩メ軽ク添へ拇指モ亦軽ク添フルヲ要ス

それでは、小沢は何故このような木剣の把持法を提唱したのであろうか。その理由について、小沢は同書の「緒言」において、次のように述べている<sup>46)</sup>。

元来剣術ハ右手ニテ縁ヲ握リ左手ニテ柄頭ヲ握ルヲ常法トスレドモ吾ガ体育流ニ於

テハ此ノ方法ノ外尚ホ之ト反対ニ左手ニテ縁ヲ握リ右手ニテ柄頭ヲ握リ斬突スルノ方法ヲ兼有セリ是レ体育上身体ノ各部ヲ均齊ニ發育セシムル為メ且ツ左右上肢下肢共ニ同ジク動作ニ慣レシムルガ為メノミナラズ実戦ニ当リテ右手右足ヲ傷ツケラルルコト有ルモ左手左足ニテ働クヲ得ベキガ故ニ之レヲ進化セル剣術ナリト云フモ敢テ過言ニ非ザルベシ然レドモ此ノ如ク左手左足ガ右手右足ト同ジク利敏ナルハ古来剣道ノ達人比々皆然リ兩刀使ヒノ宮本武蔵ハ言フヲ須タズ上泉伊勢守、伊藤一刀斎、塚原ト伝、柳生父子、関口弥太郎ノ如キ何レモ鬼神ノ如キ妙術ヲ得タルモノニシテ左右手其ノ働キニ優劣ナキニ徴シ益々此ノ流義ノ優秀ナルヲ見ルニ足ラザル無キヲ得ンヤ況ンヤ

つまり小沢は、「体育上身体ノ各部ヲ均齊ニ發育セシムル為メ」<sup>47)</sup>に、木剣の把持法にまで医学的合理主義に立脚した体育観を持ち込み、「進化セル剣術」<sup>48)</sup>として、元来の剣術には通常なく、刀体操でも提示されることのなかった方法、すなわち「左手ニテ縁ヲ握リ右手ニテ柄頭ヲ握」<sup>49)</sup>る方法を提示したのであった。

このように、剣術形体操における胴技の練習方法では、左胴と右胴の両方を斬撃することは勿論のこと、身体各部の均齊的發育を狙って、木剣の把持法までもが左右対称につくられ解説されていた。

## 5. 結び

本研究は、学校体育に剣術を正課教材として採用させることを念頭に置いて試みられた小沢卯之助の武術体操法、すなわち刀体操（1897年）と剣術形体操（1911年）とに取り上げられる胴技の練習方法の比較検討をと

して、それがどのように改良されていったのかについて解明することを目的としていた。本論で検討した結果を踏まえ、本研究の結論を述べたい。

1. 刀体操では、従前の剣術界が否定的に捉えていた左胴打ちを右胴打ちと同等に位置づけ、身体の平等的発育を狙うことに主点を置いた胴技の練習方法が提示されていた。
2. このような胴技の練習方法は、剣術形体操にも継承されていた。但しそこでは、身体の各部を均一に発育させるべく、木剣の把持法までもが左右対称につくられ解説されていた。
3. つまるところ、小沢の武術体操法では、医学的合理主義に立脚した体育観に基づく剣術を創生すべく、胴技の練習方法にこのような改良を重ねることで、その具体化が図られたのである。

### <注記および引用・参考文献>

- 1) 中野八十二：剣道の技術史、岸野雄三・多和健雄編、スポーツの技術史、266、大修館書店、1972
- 2) 根岸信五郎：剣道理論、杉山清作編、心身鍛錬 文部省第一回撃剣講習録、99、自刊、1912
- 3) 今村嘉雄：日本体育史、137、金子書房、1951
- 4) 高野佐三郎：剣道、290、剣道発行所、1915
- 5) 岸野雄三・竹之下休蔵：近代日本学校体育史、64、日本図書センター、1983
- 6) 石井隆憲：小沢卯之助と剣道教授法、尚美学園短期大学研究紀要、1、108、1987
- 7) 矢野裕介：1900年前後における剣術の体操化過程にみる胴技の変容：小沢卯之助ら

- の武術体操法に着目して、体育学研究、59（2）、631-632、2014
- 8) 小沢卯之助：剣術形体操：一名・体育流剣術、24、学海指針社、1911
  - 9) 扱う史料については、旧字体を新字体に改めた。
  - 10) 小沢卯之助：剣術形体操：一名・体育流剣術、5、学海指針社、1911
  - 11) 同上書、2
  - 12) 小沢卯之助：武道改良教授武術体操論、44-45、小林千鶴堂、1986
  - 13) 同上書、63-64
  - 14) 中村民雄：明治期における武術体操法について（一）、武道学研究、9（2）、61、1976
  - 15) 小沢卯之助：武道改良教授武術体操論、138、小林千鶴堂、1986
  - 16) 同上書、74
  - 17) 小沢卯之助：武術体操法、緒言、大日本図書、1897
  - 18) 同上書、目次
  - 19) 小沢卯之助：非撃剣可撃剣両者に望む、教育持論、420、10、1896
  - 20) 矢野裕介：1900年前後における剣術の体操化過程にみる胴技の変容：小沢卯之助らの武術体操法に着目して、体育学研究、59（2）、630-631、2014
  - 21) 小沢卯之助：非撃剣可撃剣両者に望む、教育持論、420、10、1896
  - 22) 同上書、420
  - 23) 小沢卯之助：武術体操法、目次、大日本図書、1897
  - 24) 同上書、119
  - 25) 同上書、119
  - 26) 同上書、122
  - 27) 同上書、167-168
  - 28) 同上書、167
  - 29) 同上書、167

- 30) 根岸信五郎の『撃剣指南』(6、自刊、1884)では、竹刀の把持法が、柄「頭ヲ左手ニ取り小指ヲ軽ク握リ締メ其他ノ四指ハ力ヲ用ヒス恰モ鶏卵ヲ握ルノ状ヲ為シ右手ハ鐔元ニ置キ拇指ヲ以テ食指ヲ覆ヒ力ヲ偏用セス」と解説されている。把持法に関する同様の記述や絵図は、井ノ口松之助の『兵法要務柔術剣棒図解秘訣』(94、魁真楼、1887、図4参照)や市川宜堅の『剣法独案内』(7、柏原政次郎、1895)、米岡稔の『撃剣柔術指南』(11、東京図書出版、1897)等にも確認できる。
- 31) 矢野裕介：1900年前後における剣術の体操化過程にみる胴技の変容：小沢卯之助らの武術体操法に着目して、体育学研究、59(2)、636、2014
- 32) 例えば亀山大城の『撃剣ト柔術図解』(32、大成堂、1896)では、左胴打ちが、「術法にては決して許さざる」ものと捉えられているように、「1884年から1897年までにおける代表的な剣術書における胴技の内容は、左胴右胴のうち右胴のみを打つことを目的として解説されていた」という(矢野裕介：1900年前後における剣術の体操化過程にみる胴技の変容：小沢卯之助らの武術体操法に着目して、体育学研究、59(2)、625-637、2014)。
- 33) 小沢卯之助：武術体操法、121、大日本図書、1897
- 34) 小沢卯之助：非撃剣可撃剣両者に望む、教育持論、420、10、1896
- 35) 小沢卯之助：武術体操法、緒言、大日本図書、1897
- 36) 矢野裕介：1900年前後における剣術の体操化過程にみる胴技の変容：小沢卯之助らの武術体操法に着目して、体育学研究、59(2)、631-632、2014
- 37) 小沢卯之助：剣術形体操：一名・体育流
- 剣術、3、学海指針社、1911
- 38) 同上書、24
- 39) 同上書、13-14
- 40) 同上書、8
- 41) 同上書、69
- 42) 同上書、95-97
- 43) 小沢卯之助：武術体操法、122、大日本図書、1897
- 44) 従って、構え方も左手前左足前の「左構」、右手前右足前の「右構」の2種が設定されている。
- 45) 小沢卯之助：剣術形体操：一名・体育流
- 剣術、50、学海指針社、1911
- 46) 同上書、5-6
- 47) 同上書、5
- 48) 同上書、5
- 49) 同上書、5